“つながる”自動車 日本総研の眼

宮内（みやうち）　洋宜（ひろのり）
日本総合研究所
副主任研究員

社会との関係が深まっていく自動車

自動車はこれまで個人との結びつきが強いものであった。「自家用車」や「マイカー」という表現は日常的に用いられる言葉であろうが、自動車は自分のものという概念を色濃く反映している。実際に自動車は人のためより自分達のために使われることが多い。ナンバーの色で区別をすれば営業用に対して自家用の割合は圧倒的に高い。特に乗用車はほぼ100％が自家用であり、貨物車でも昨年末の状況でその割合は90％を越える。自動車は私用の乗り物なのである。

自動車が個人の乗り物として活用されているのは、そもそもより遠くへ快適に人が移動するための道具として作られたことを考えれば当然のことである。そして、T型フォードの量産以来、皆が自動車を入手しやすくなるように努力が続けられてきた。民間だけではなく、国がそれを支援することもあった。例えば、日本独自の規格である軽自動車がいわゆる国民車構想をもとに作られたのは有名な話である。あわせて産業発展への寄与を狙うこの戦略は、今も中国、インド、マレーシアといったアジア諸国で実施されている。

しかし、自動車の普及率が上昇し、一家に一台が当然になり、皆が自動車を使うようになってくると、事故や渋滞、環境汚染といった問題が起こりはじめる。それに対応するため、様々な技術やサービスが考えられてきた。このような自動車を取り巻く状況の発展は、自動車そのものあり方を変えていく。キーワードは「つながり」だ。

情報とのつながりを提供する通信技術の進歩や実装は、自動車の利便性を大きく向上させた。路車間の通信、カーナビゲーションシステムと通信の連携はその代表例である。車車間通信の実現に向けた取り組みも続けられている。これらの恩恵は渋滞の回避、平均移動速度の上昇、事故の予防と多岐にわたる。

電力網とのつながりも生まれた。電気自動車やプラグインハイブリッド自動車は充電のために電力網に接続される。近年ではこれら電動車両から電気機器や家全体、さらには電力網そのものへと逆向きに電気を提供する技術開発が盛んに行われている。

さらには、自動車が介在して人同士のつながりも生じるようになっている。古くからオーナーズクラブなどの車が仲立ちする交友関係はあったが、ソーシャルネットワーキングサービスの普及によってこの関係はバーチャルにも拡大している。

自動車そのものの共有も、ある種、人と人とのつながりだろう。古くからレンタカーはあったが、最近利用者が増加しているカーシェアリングは複数の人が自動車を共有するというアイデアを基にしたサービスである。個人で利用するものだが、個人の自動車ではないという典型例と言えよう。

このようなつながり、すなわち自動車と社会との関わりが増えていくことは、自動車が個人の単純な所有物として独立した存在では無くなりつつあることを意味している。そしてそのことは社会の中における存在として自動車の存在価値が高まっていくことにつながるはずだ。本連載では、自動車が様々なものとつながっていく様を紹介し、未来の自動車があるべき姿を問いかけていきたい。

（次回は5月14日付）